

紀 要

第 3 号

目 次

序

1. お米を作りだしたころ……………(浜崎悟司・細川修平・奈良俊哉)
 2. 滋賀県下の方形周溝墓の“供献土器”について……………(吉田秀則)
 3. 手焙形土器雑想
—葛籠尾崎湖底遺跡出土品に寄せて—……………(小竹森直子)
 4. 三つの古墳の墳形と規模
—近江における古墳時代首長の動向および特質メモ作成のために—
……………(用田政晴)
 5. 野洲川下流域の古代豪族の動向
—近江古代豪族ノート4—……………(大橋信弥)
 6. 満願寺廃寺出土瓦の産地……………(三辻利一・北村大輔・北村圭弘)
 7. 信楽と丹波……………(松澤 修)
 8. 人形茶碗・人形手茶碗
—考古学的視座からのアプローチ—……………(稲垣正宏)
-

1990. 3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

1. お米を作りだしたころ

細川修平・奈良俊哉・浜崎悟司

奈良：近江では最近、縄文時代の晩期の土器と、弥生時代前期の土器が共伴して出土する遺跡がたいへん増えてきました。

これまで近江では、縄文時代晩期といえば滋賀里遺跡を想像するほどこの遺跡は晩期の中核となる遺跡であります。また、弥生前期の遺跡ではこれと同じように、前期の水田跡を検出した服部遺跡があります。しかしながら、この二つの時期を埋める遺跡がこれまであまり調査されておらず不明瞭な部分があったのです。ところが、琵琶湖総合開発による発掘調査で、琵琶湖の周囲を調査する機会にも恵まれたこともあって、この二つの時期を埋めるような遺物や遺構が検出されるようになりました。

そこで今回のディスカッションでは近江の縄文時代から弥生時代にかけての、主に土器を中心とした討論を行っていきたいと思います。

奈良：それではまず、弥生時代前期の資料としてあげた、烏丸崎遺跡・山賀遺跡・赤ノ井遺跡・川崎遺跡・針江浜遺跡などの前後関係、また前期のどのくらいに位置するかをお聞きしたい。

浜崎：まず烏丸崎遺跡の土掘一括遺物ですが、これは壺のプロポーションや削り出しの感じからいえば、前期のなかでも古い段階に入ると考えられます。

細川：畿内との併行関係で古いというよりも、近江の中で最も古い時期にあたるものだと思います。

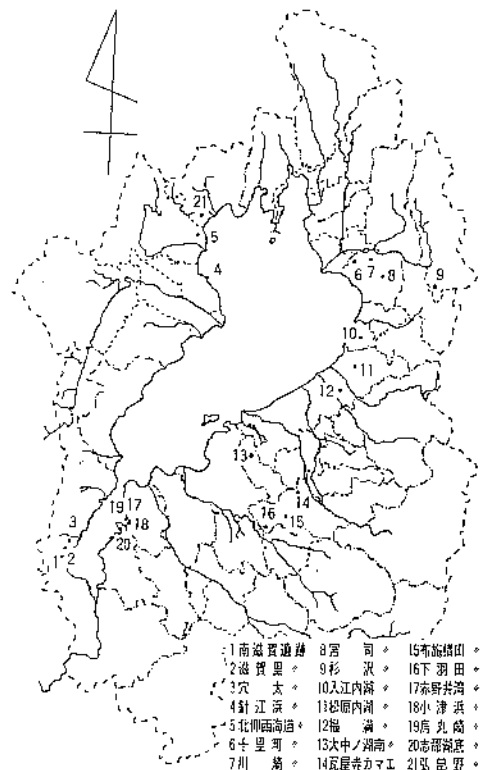
また、これまでの弥生時代前期の編年観を応用して遺跡年代観を言えば、烏丸崎遺跡→川崎遺跡→山賀遺跡という三つの段階があることは、現状では否定できないと考えられます。

奈良：針江浜遺跡では全く縄文時代晩期の土器が出ていないわけですが、全体として考えれば山賀遺跡より新しい時期の遺跡と言えるのではないのでしょうか。

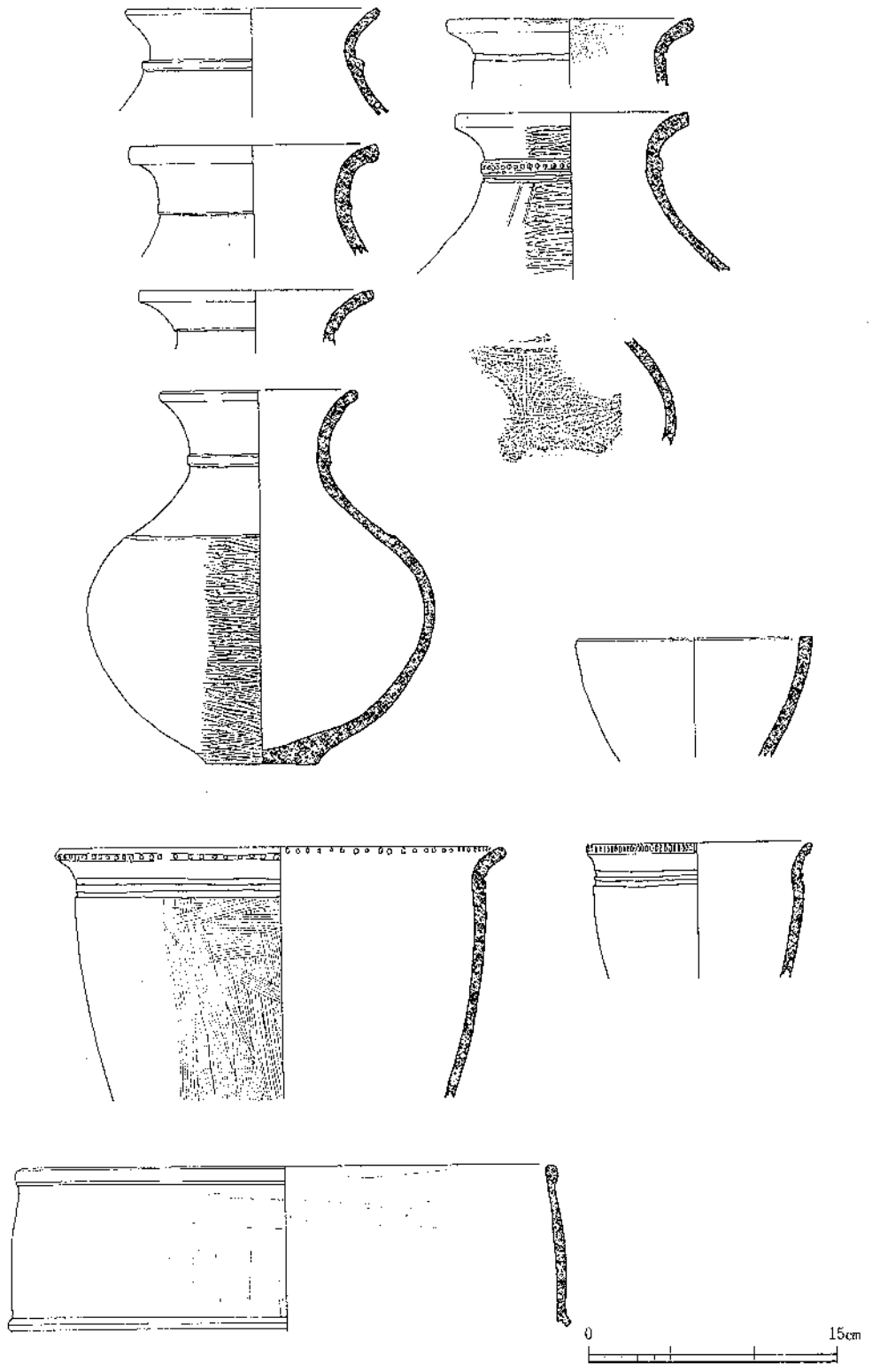
細川：全体として考えてみても、やはり山賀遺跡と同じ段階のものとして良いと思う。

浜崎：この段階の土器を出す遺跡は、ここにある資料以外にもかなり多くあります。

奈良：今、前期の資料を三つの段階に分けさらに、烏丸は畿内の古段階ではないというならば、烏丸は



第1図 遺跡位置図



第2図 烏丸崎遺跡出土遺物

畿内併行で行うとどの時期にあたるのでしょうか。

細川：大阪府亀井遺跡で実際には古段階から中段階の土器をまとめたが、やはりそれとはプロポジションも違う。烏丸の壺は前期中段階の前半とでも言うべきであろう。

浜崎：川崎遺跡出土の土器は以前から古段階としているが、烏丸の土器が畿内中段階併行であればそれよりも新しくなるので、中段階の後半とした方が良い。

細川：錦織遺跡でも削って段を作る土器が数点出土しており、これも中段階の前半に入ると考えられるが、遺跡全体としての評価はまだわからない。この手の古い土器は県内全体を見ても、ポツポツと出土していることは確かであることを付け加えておきたい。

奈良：近江の縄文時代晩期を概観すると、まず滋賀里Ⅳ期の時期を中心とした滋賀里遺跡などの湖西南部グループが上げられる。ここにはもちろん穴太遺跡も含まれる。

次に、湖西北部の北卯西海道遺跡を中心とした湖西北部グループ。ここは、遺跡としては滋賀里Ⅲ期を最盛期とする遺跡です。

この時期の湖南・湖東・湖北を見ると、大集落を形成したと考えられる遺跡はたいへん少ないことが特徴として上げられます。湖南では、草津の志那湖底遺跡で滋賀里Ⅰ～Ⅱ期の甕棺墓が検出されており、また伊吹町杉沢遺跡も滋賀里Ⅰ～Ⅲ期、また内陸部のほうでは、蒲生町の杉ノ木・平塚遺跡などが上げられますが、いずれも大規模な集落であったとは考えられません。

細川：碧かに湖の東側では滋賀里Ⅰ～Ⅳ期の遺跡は少ないと言える。

奈良：ところが船橋・長原の時期になると湖の東側では爆発的に遺跡が増えてくる。今ここにあげた資料の他にも数ヶ所あげることができます。

この時期の縄文晩期の土器は必ず弥生時代前期の土器と一緒に出土しています。言い換えれば、八日市の瓦屋寺カマエ・日吉・下羽田遺跡以外は全部弥生時代前期の土器と一緒に出るのが特徴となっています。湖の西ではこれとは逆で、滋賀里・穴太周辺でも非常に少なくなりますし、今津周辺のグループも船橋・長原期の遺構は減少する傾向にあると報告されています。また、湖の西側では船橋・長原の時期の土器と弥生時代前期の土器と一緒に出土するという事はほとんどないのではないかと考えています。

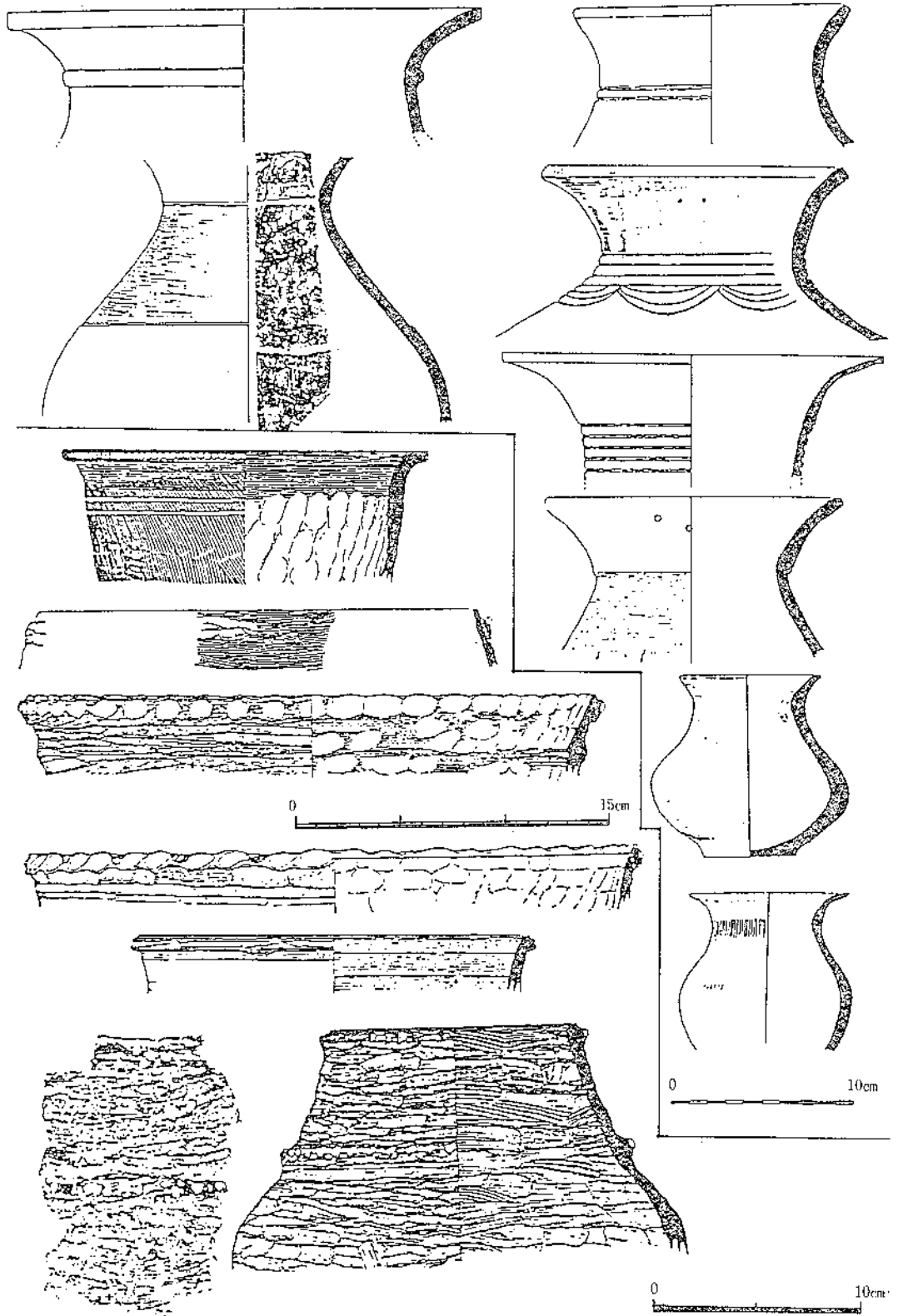
細川：大津市教育委員会や滋賀県教育委員会でも、かなり滋賀里・穴太地区を発掘していますが、確かに船橋・長原期の土器はあまりでていません。そして、弥生時代前期の土器も錦織周辺を中心に多少出土していますが、たいへん少ない。

ところが、弥生時代中期になるとかなり遺跡の数も増えるし、穴太遺跡でも中期の遺物は多量に出土しています。

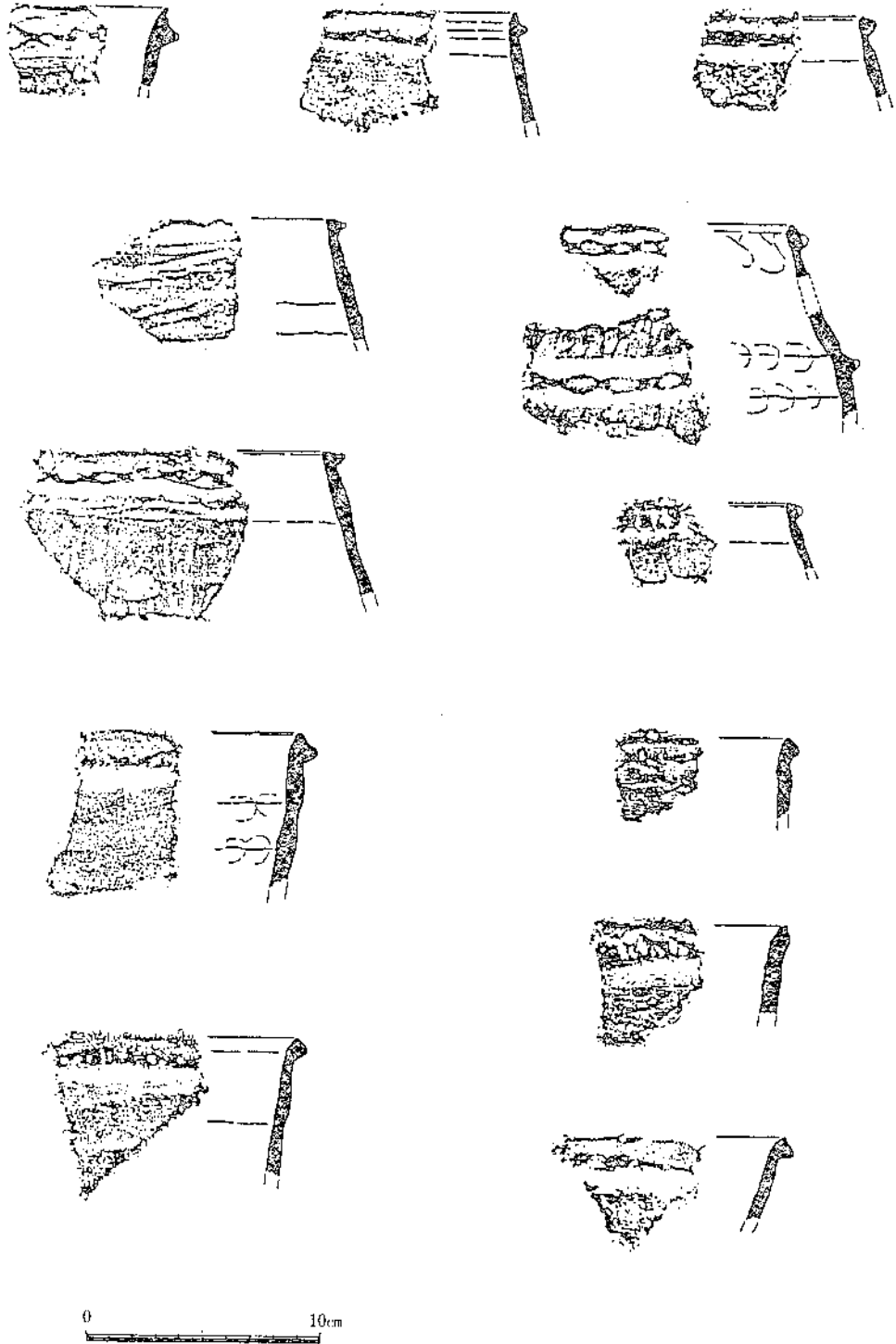
このことは湖西全体として言えることではないかと考えています。

奈良：以上のことをまとめて言いますと、滋賀里Ⅳ期までは湖の西側に大集落を築き、その後、船橋・長原期では集落を湖の東側に移して生活をする。そこで、水稻農耕を初めて行い、やがて中期の段階になると、西側でも東側でも安定した大集落を作るようになって考えられないでしょうか。

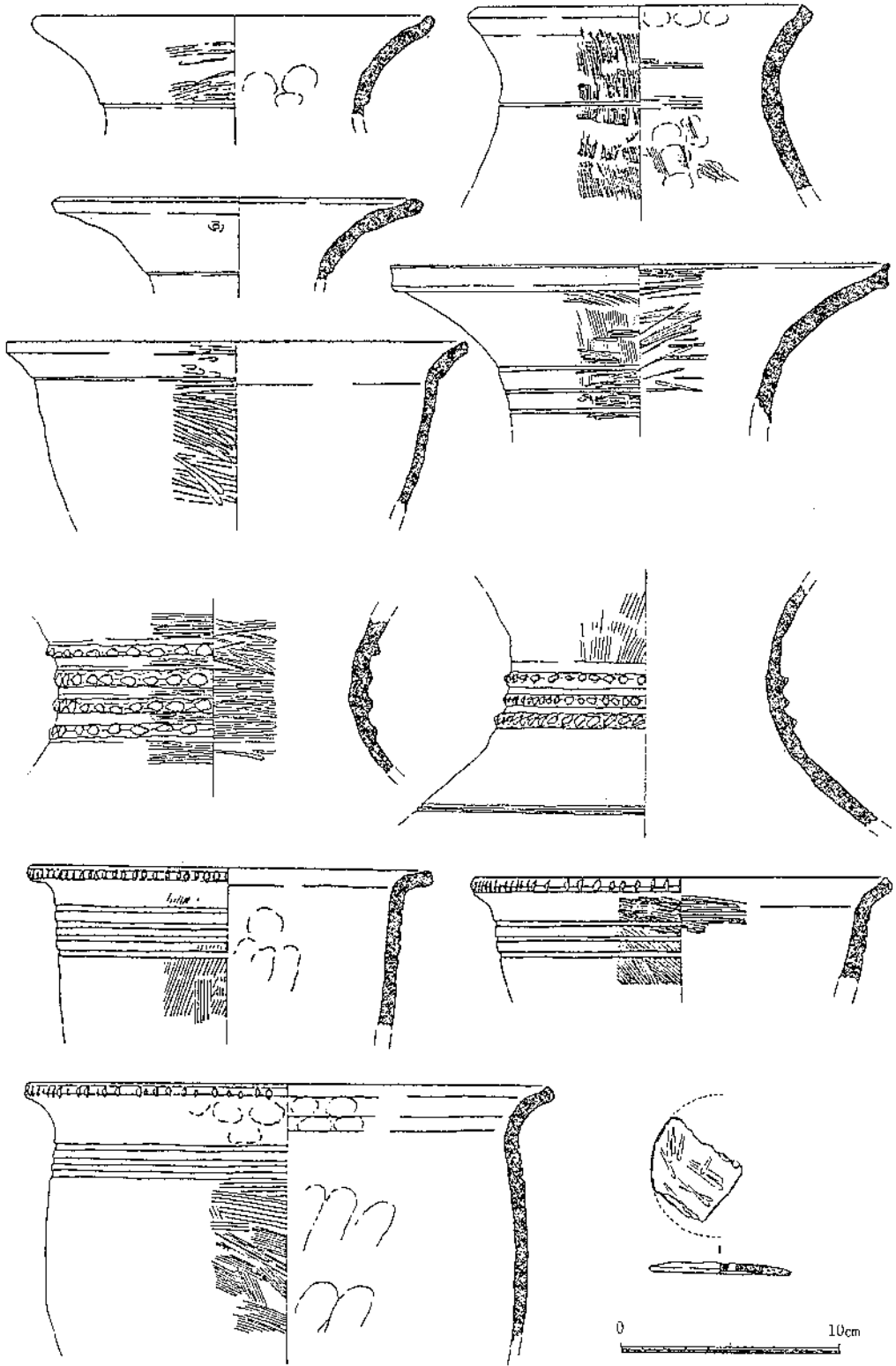
浜崎：現状ではそういった傾向があることは基本的に賛成出来ると思います。



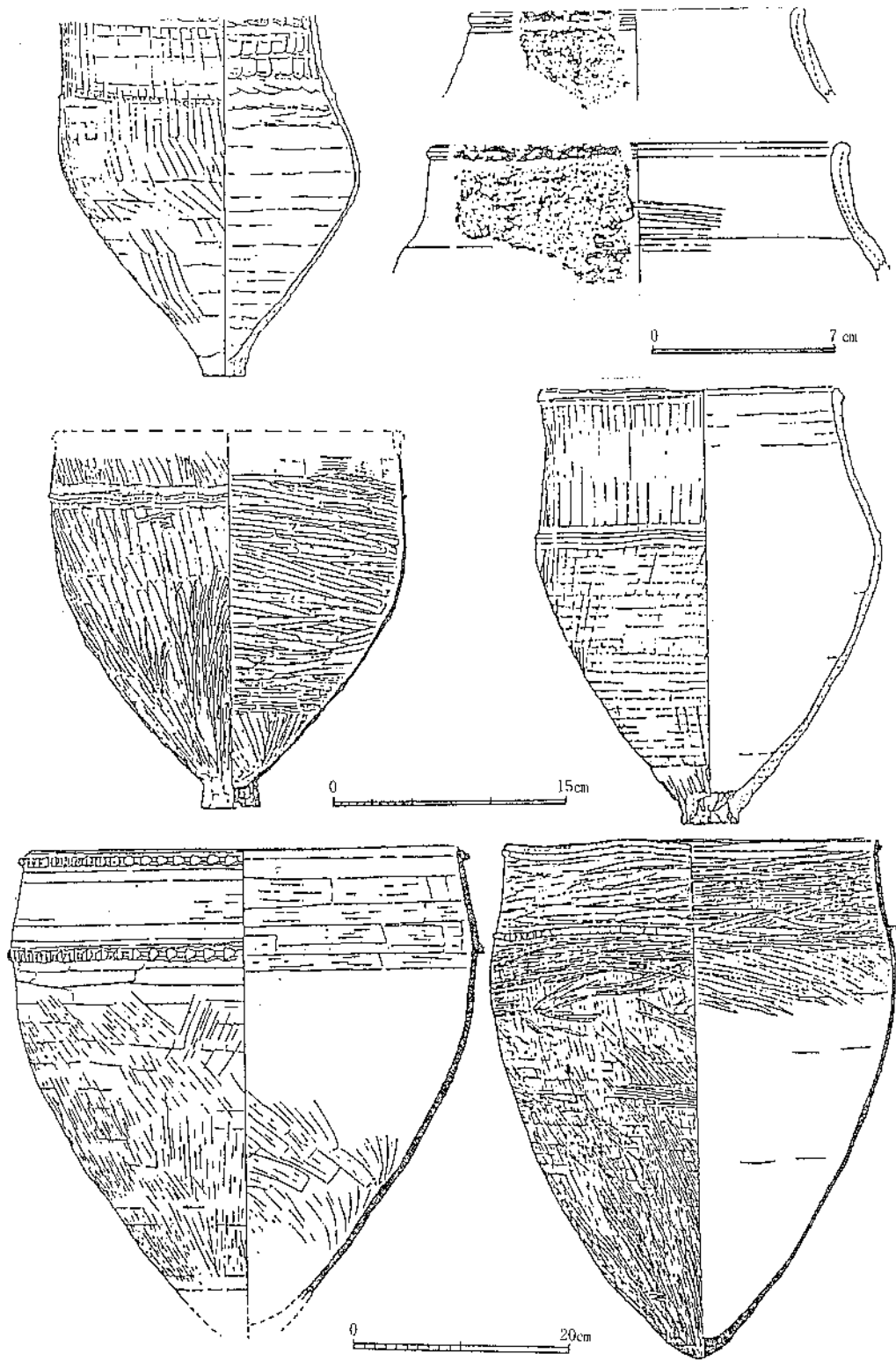
第3図 長浜平野出土遺物



第4圖 山賀遺跡出土遺物(1)



第5圖 山賀遺跡出土遺物(2)



第6图 八日市市内出土遗物

奈良：湖西南部を特にとりあげてみましたが、他の地域ではどうでしょうか。

浜崎：長浜平野では川崎遺跡なんかでその様相がとらえられる可能性があると思います。

奈良：川崎よりも国友や大辰巳といった所の方が、地形的には標高も高く、住みやすいのではないのでしょうか。

浜崎：北陸自動車道の側道を通ると良くわかりますが、東西方向に微高地形があって、川崎はその微高地上にあると思うし、長浜平野は姉川の影響があって、こうした微高地はかなりあると考えられるし、遺跡のあり方も帯状にあると考えています。

奈良：川崎遺跡の報告書を見ると縄文晩期の土器は東海系の土器が写真に載っていますが、弥生土器は東海の影響が見られるのでしょうか。

浜崎：前期の新しい段階では壺の口縁端部のキザミが浅く右上りになる。また口端部が丸くおさまらずつまみ上げたようになるものが見られる点などは、伊勢湾方面と共通する要素といえるのではないのでしょうか。

宮司の縄文土器はキザミが粗く、これは東海系の土器ではないかと思います。

細川：川崎の弥生土器は、この実測図を見る限りではやはりさほど古い時期であるとは考えられない。またもっと細かく見なければならぬが、報告書にある縄文土器はかなり東海の影響を受けているものであり、とてもこの弥生土器と同じ生活をしていたとは考え難い。

奈良：松原はどうですか。

細川：松原は立地として谷間の小さな出っ張り状のところに生活していたと考えられ、生活面としてはさほど広い所ではない。

浜崎：入江内湖や松原は、他地域と比べるとかなり小さいグループになると思います。

奈良：福満を入れるのだから、結構大きくなりませんか。

細川：福満は滋賀里のⅣ期もあるのではないのでしょうか。また、資料的にも特殊な状況にあると思われるので、福満については別途論じることにはしたいと思います。

奈良：それでは、湖南の方はどうでしょうか。

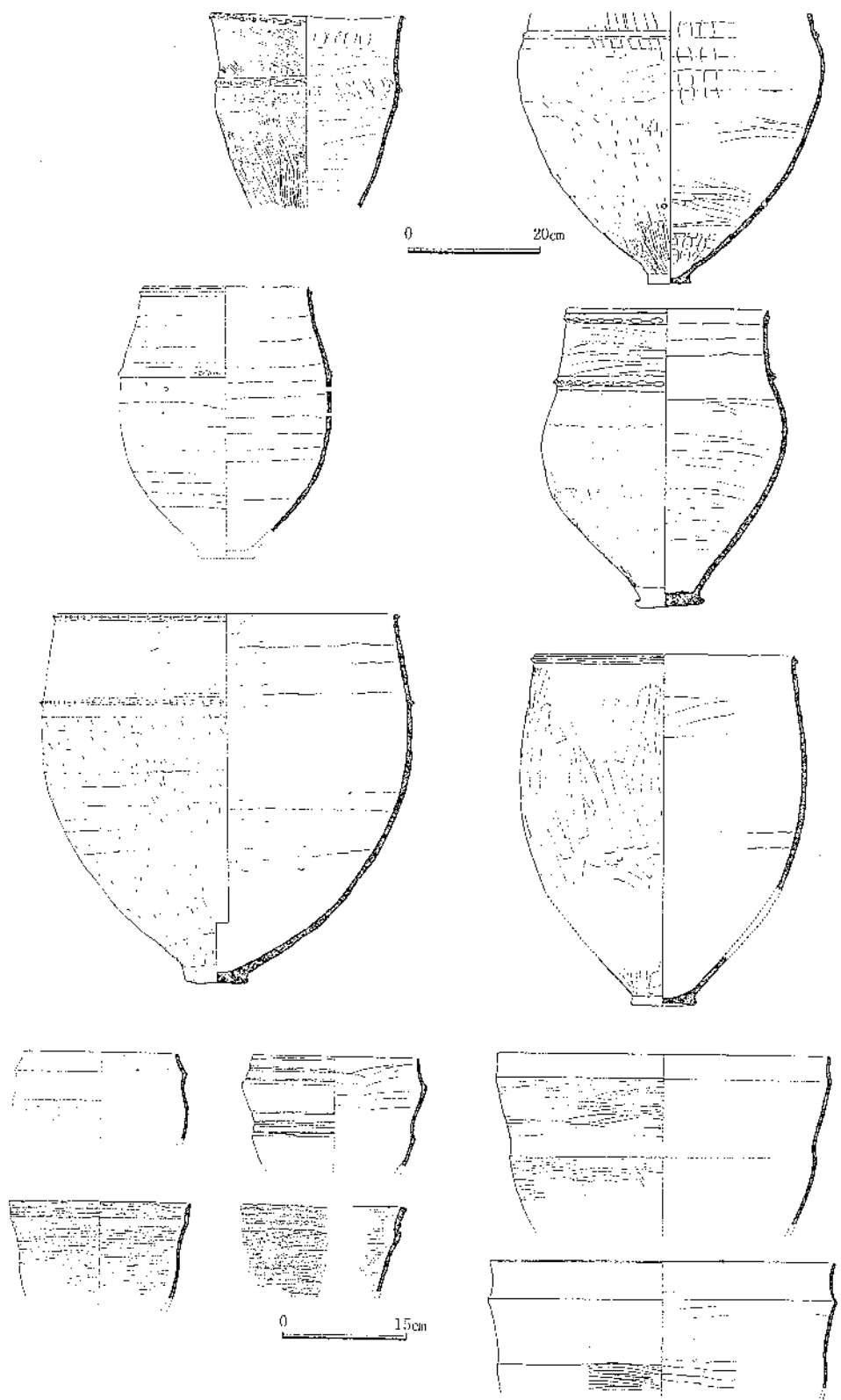
細川：野洲川下流域を含めた烏丸・小津浜・山賀・赤野井といった地域は、現状での発掘が東西方向の線的な発掘にとどまっているため、まだまだ新しい発見があると考えています。そのような状況の中にあっても、烏丸の土拵一括資料や、小津浜・山賀の土器を見ても、やはりこの地域が県下では縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての遺跡では大規模なものであると考えている。

細川：烏丸遺跡の一括資料を扱う場合に注意しなければならないことがある。

それは、相伴して出てくる土器を見て「一緒に生活して相伴土器なのか」、「時間的な連続のなかでの相伴なのか」ということを同じレベルで考えてはいけないということである。

烏丸の資料を見ると、これは「一緒に生活して相伴した土器」と見ることができるのではないのでしょうか。

奈良：時間的な連続性を考えるならば、畿内では北部九州のような縦割りをすることは不可能であると考えています。



第7図 今津町内出土遺物

近江で弥生土器が出現したころの状況は、1. 縄文土器のみの文化をもつ集団、2. 弥生と縄文土器をもつ集団、3. 弥生だけの集団という3つの集団が混在している状況ではないかと考えています。

浜崎：針江浜遺跡は弥生時代前期の遺跡で縄文時代晩期や弥生時代中期の土器はないけれども、それはどのように評価したらよいのでしょうか。

細川：針江浜遺跡の時期は前期でもかなり新しい段階であるので、そのころには縄文晩期の土器がもう無くなって良いころだと言える。

浜崎：針江浜遺跡は全く縄文と重ならない時期なのですね。

細川：ここにある資料以外にも、多条沈線をもつ土器が出土しているし、かなり新しい時期を含んでいる。

奈良：針江浜遺跡は各種の遺構があり、全く縄文土器が伴わないというのは、時間的な問題なのか、それとも特殊な遺跡と言うべきなのかどちらなのだろう。

私は、針江は時間的な問題として取り上げて、弥生中期へ向かうステップ段階の遺跡として評価したい。

細川：弥生中期が広がるためには、針江みたいなステップ段階の遺跡があってもおかしくはない。

浜崎：そうすると遺跡をタイプ別に分ければ

①縄文晩期末で終わるもの

②縄文晩期から弥生へ続くもの

1. 縄文晩期から弥生前期の古いところに続くもの。
2. 縄文晩期から弥生前期中頃のところに続くもの。

③弥生前期の新しい段階のところから始まるものの5つタイプに分けられるというわけですね。

奈良：①は八日市周辺の遺跡。②-1は烏丸遺跡があてはまる。

細川：②-2は川崎があてはまる。また山賀もこの時期に始まると考えて良いと思います。

③は、針江浜遺跡があてはまる。

奈良：山賀を②-2にあてはめるのなら、松原もその時期からのもので良いのではないのでしょうか。

細川：先ほど、弥生前期を3つの時期に大別したが、厳密に言えば、川崎と山賀、松原は区別しにくいと言える。これは土器の出土状況からくる混在に原因があると思います。

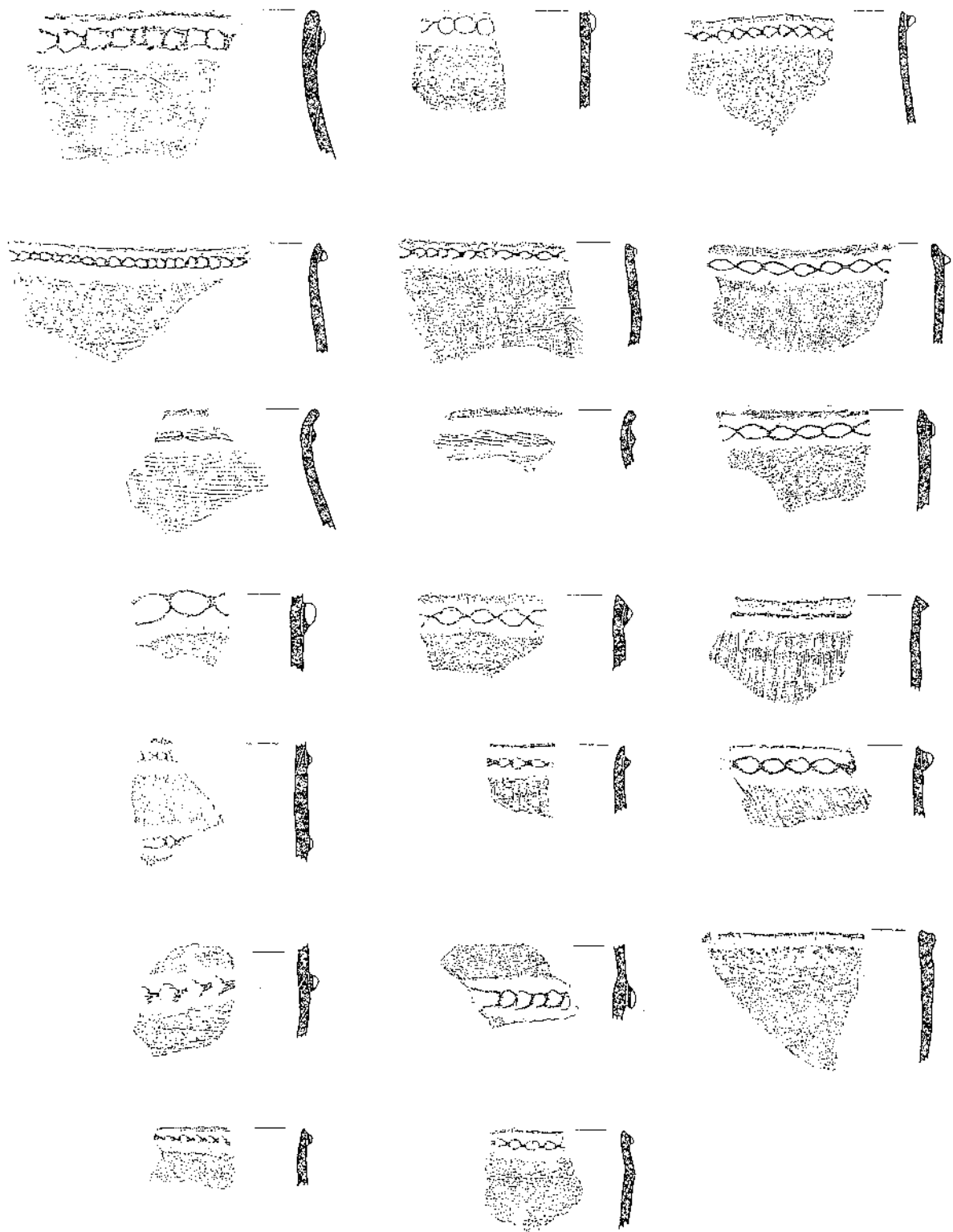
浜崎：そうすると弥生の前期で新しい時期の遺跡である針江浜遺跡についてはどうでしょうか。

細川：弥生前期を遺跡別に分けるとすれば古い段階の烏丸が縄文と共伴する時期、そして川崎・山賀・松原といった弥生時期の段階を踏んで、縄文のなくなる針江浜の時期になると考えるのが良いのではないのでしょうか。

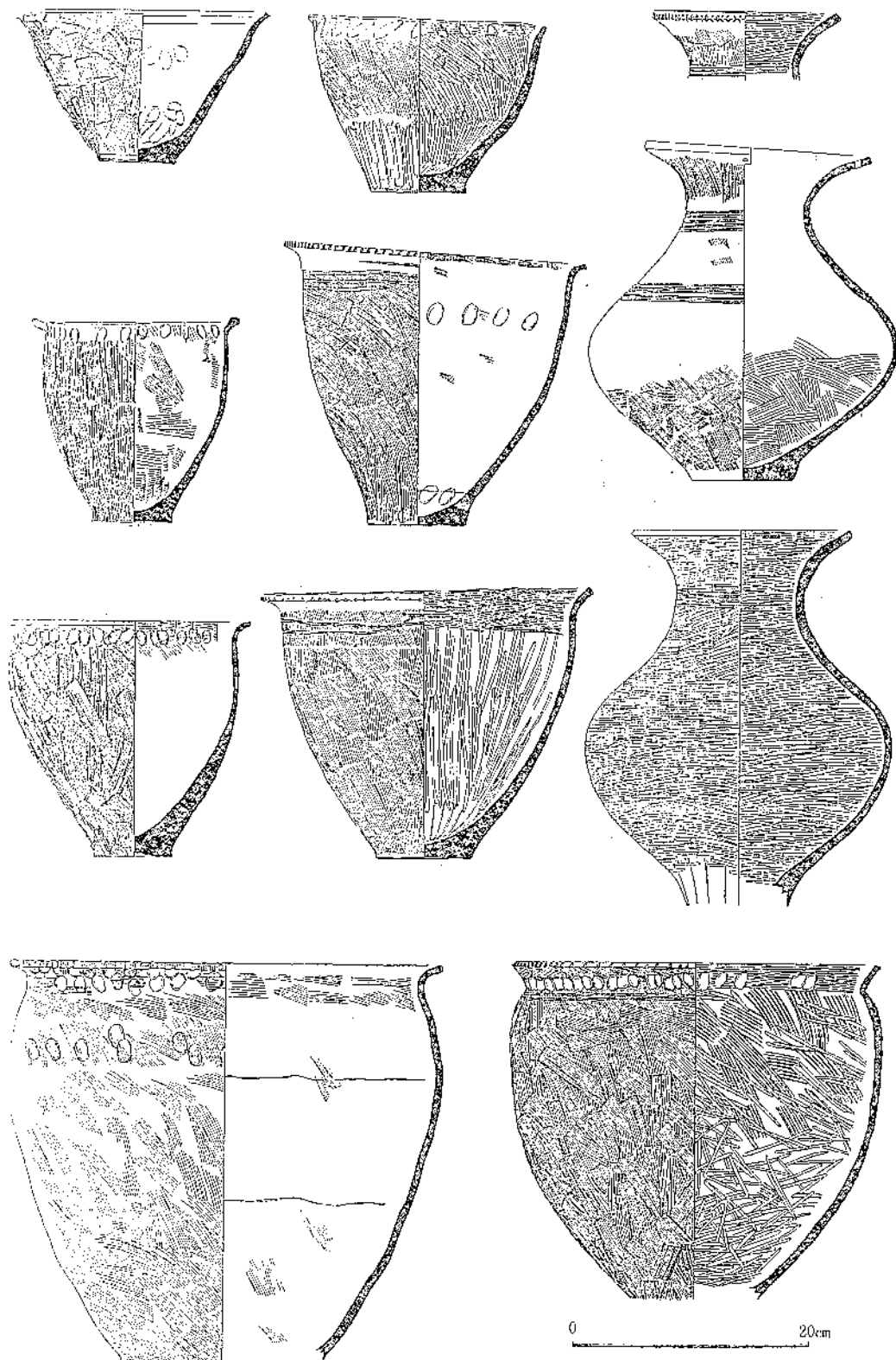
細川：弥生時代以前に、水稻農耕を受容するグループがあったと考えられないだろうか。

まず北仰・針江・弘部野で、ひとつくくれる。また、大津南部でも滋賀里を中心でくくれる。

(高島グループ)



第8圖 松原内湖遺跡出土遺物



第9圖 針江浜遺跡出土遺物

浜崎：南のグループは、赤野井湾を中心としたひとつのグループで統一される。(湖南グループ)

奈良：大中ノ湖南・西ノ湖・能登川周辺でひとつのグループが形成されていると考えられる。(大中ノ湖グループ)

細川：入江内湖・松原内湖周辺も一つのグループと考えられますね。(彦根グループ)

奈良：あと、滋賀里・穴太あたり(湖西グループ)を忘れてはなりません。

浜崎：長浜・伊吹・八日市周辺にもそれぞれ1群を設定しておきましょうか。(長浜グループ)、(伊吹グループ)、(八日市グループ)

奈良：そんなところでしょうか。大体このような8程度の受容体があると考えて良いかもしれない。(図10)

細川：これらのグループは、縄文時代はかなり古い時期からグループ分けされていると考えている。

北部九州は水稲農耕をするのに大きな人の動きによってなされたと考えられるが、近畿特に近江では大規模な人の動きによって水稲農耕が始まるとは考え難い。

そこで、この8つのグループが縄文時代より、多少の消長をくり返しながらも成長していき、水稲農耕を受け入れていったと考えている。

浜崎：そうした考えを入れるなら、最初に指摘のあった湖の西側のグループが、弥生前期に東側に移ったという考えはダイナミックですね。

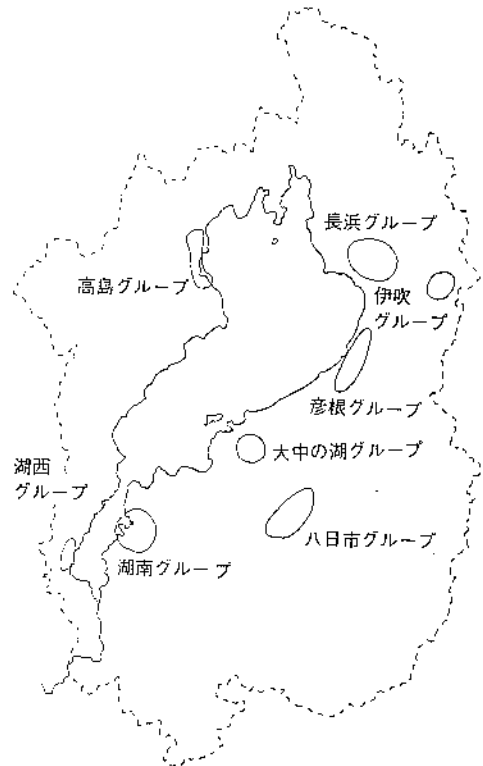
奈良：滋賀里のグループは弥生前期の遺跡がたいへん少なく、晩期終末期ではやはり、湖の東側に移っていたと考えたい。

細川：確かに、晩期から前期にかけては遺跡の数は少ないが、細々とはある。前期の土器も少ないがある。これは在地の8つのグループが伝統として残っており、中期になってからまた、大きな集落を作りはじめると考えたい。

奈良：それは晩期末に東へ移動し、発展した中期の段階にもどってくると考えた方が良くはないか。

細川：そうではなくて、湖の対岸には行かず細々と生活していたと考えたい。その証拠として錦織の前期の土器があります。東側に対しては常に意識をもっており、なんらかのアプローチをかけていると考えたい。そのアプローチというのは、戦争を含む混乱状態と考えています。

浜崎：エキサイティングな考えですね。



第10図 遺跡グループ図

細川：大胆に言えば、近江では船橋・長原期に遺跡が湖東で爆発的に増えるというひとつの画期が認められ、この原因は水稲農耕が近隣で始まっていることが上げられるのではないだろうか。また水稲農耕が始まったからといってすぐに湖西グループがグループの枠を越えて東へ移住し、湖南グループがこれを受け入れていったとは考え難いのですが…。

浜崎：ともかく、稲作開始期にあたるこの頃には、各グループ間の情報に対する緊張は相当高まっていたと考えられるのですね。

細川：丹後・山陽・但馬などでは新段階で高地性集落が出来上がっており、近江では高地性集落はないものの、近隣諸国と同じように混乱期にあることは認められるだろう。

奈良：もしそのような状況が近隣諸国で認められるとしても、やはり烏丸期ではなく山賀などの新しい時期でかなり混乱を招きはじめるのではないか。

細川：私は、そうではなくて在地グループとの混乱が先にあり、その後烏丸の遺構が形成されると考えています。混乱の一つの決着として湖南グループが弥生文化を受け入れるのです。そしてこの時期、湖西グループは先細りの状況になりながらも、細々と採集を中心とした生活を送っており、大きな弥生文化の担い手にはならなかったのです。だから近江全体では、まだまだ不安定な混乱を脱したものではありませんでした。

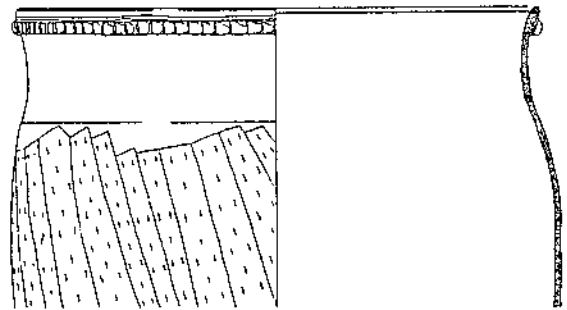
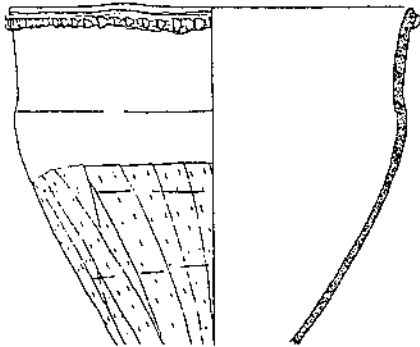
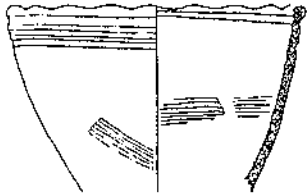
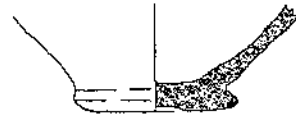
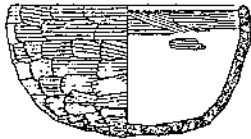
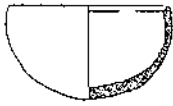
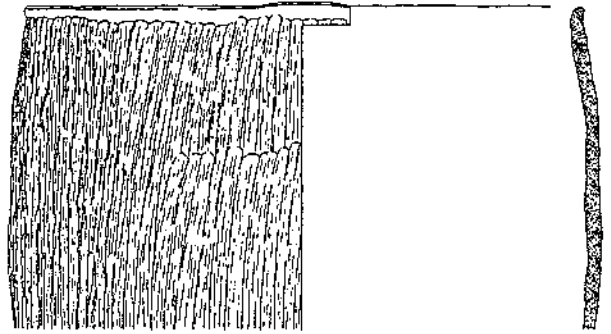
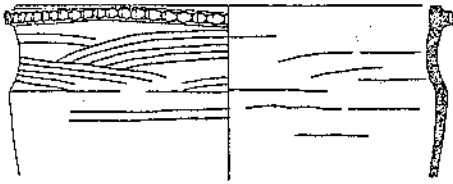
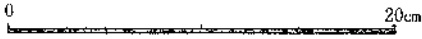
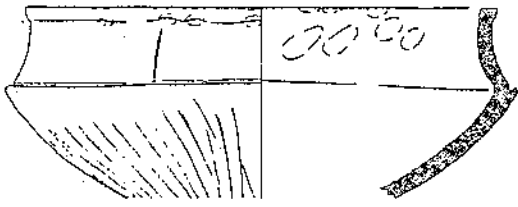
これは単発的な遺跡が、この時期の近江には非常に多いということからある程度説明されるのではないか。これが新しい時期での混乱なのです。

奈良：烏丸も小さい、八日市も小さい、縄文晩期末から弥生前期初頭にかけては大集落はない。これは文化の境目における混乱期が原因であることは認めます。また、これは混乱期を乗り切るためのひとつの手段であったのではないかと思います。

細川：石器の石材などから見れば、近江のこの時期ではサヌカイトが非常に多く、このことはまたこの時期の人々の目や耳が奈良方面に向いていたことを示すものでしょう。これは、水稲農耕をいつでも受け入れられる態勢であることを示すものです。また、近江は立地的にも受け入れやすい土地です。



第11図 錦織遺跡出土遺物



第12圖 滋賀里遺跡出土遺物 (1)

弥生中期は、これに反して近江ではその核となる集落を点でとらえられることができますが、前期ではとてもそこまではとらえることはできません。これは、前期という混乱した状態の中から淘汰されたグループと残ったグループの差であることはいうまでもなく、やはり前期では小集団同士の争いがかなりあったと認めざるを得ないと考えます。

まさに針江は整理された最初のグループであるといえる。

浜崎：湖南グループの動向についていえばこれは当地のみならず近江全体のその後に大きな影響を与えたものと思います。その点からなお一層、奈良さん、細川さんが提起された説、ここではそれを、仮に移住説、戦乱説と呼ばせてもらいますが、それらの説の提起する問題は大きいわけだと思います。そして移住説、戦乱説の根底には、互いの集団の動向を非常に気遣うような状況があったことを共通の理解とされているものと思います。

琵琶湖の水位変動を考慮に入れる必要も生じるかもしれませんが…。

細川：先ほど言ったように情報伝達能力はかなりあるということをもまず評価しなくてはならないでしょう。

奈良：これを評価するならば、縄文時代晩期末の混乱期は、新しいものを受容する状態であることを認めなくてはならないと思います。

細川：縄文後期では土器1つを取った見方をしても、各グループでは非常に個性的な動行を示しつつも、大きな交流の存在を示します。また石器も広い範囲で動いています。大きな情報ネットワークを形成していたと言っても過言ではないでしょう。このネットワークは北部九州で始まった農耕の情報をかなり早い段階で近江にもたらしただのではないのでしょうか。

奈良：情報のネットワークがあるならば、やはり戦いをする必要はなく、移住することによってそれまでの経済状況をより良い方向に変えることができるのではないのでしょうか。

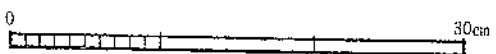
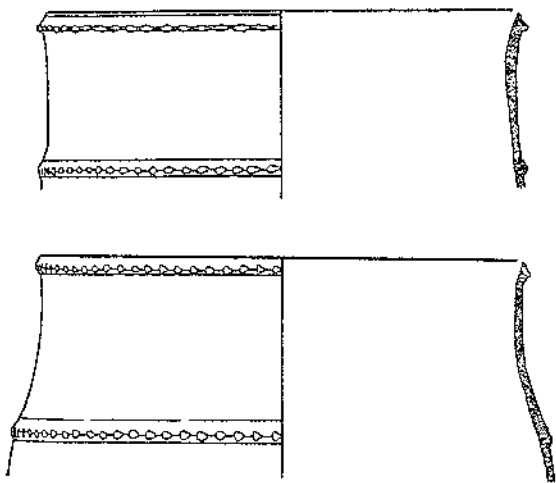
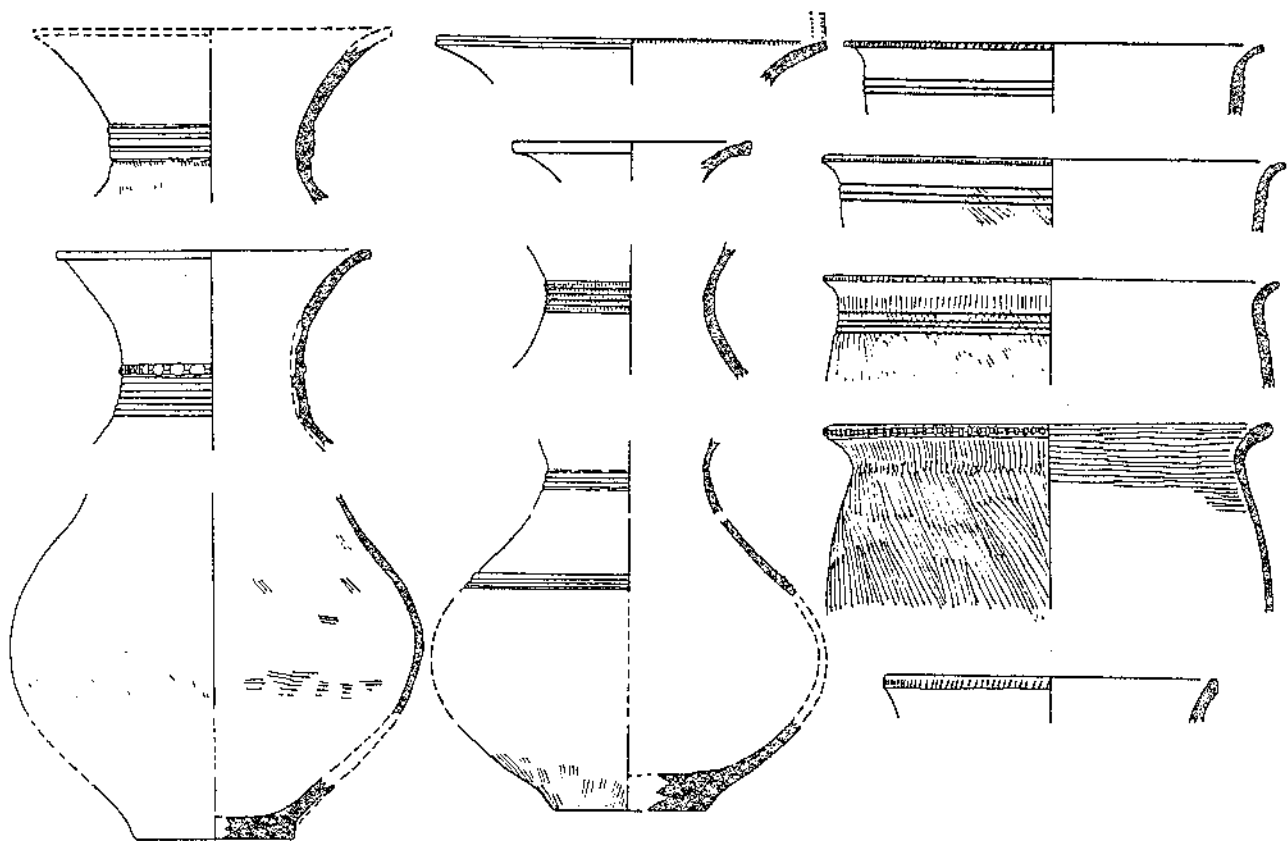
細川：農耕の情報を伝えたネットワークは、あくまで狩猟、採集を基本とする縄文社会のネットワークであり、弥生時代の農耕社会の中では再統合されねばならないと考えています。この再統合の段階を一つの戦乱状態…言葉は少し悪いですが…と考えてみた訳です。

いずれにしろ、この情報ネットワークの具体像を明らかにする作業が前提となります。

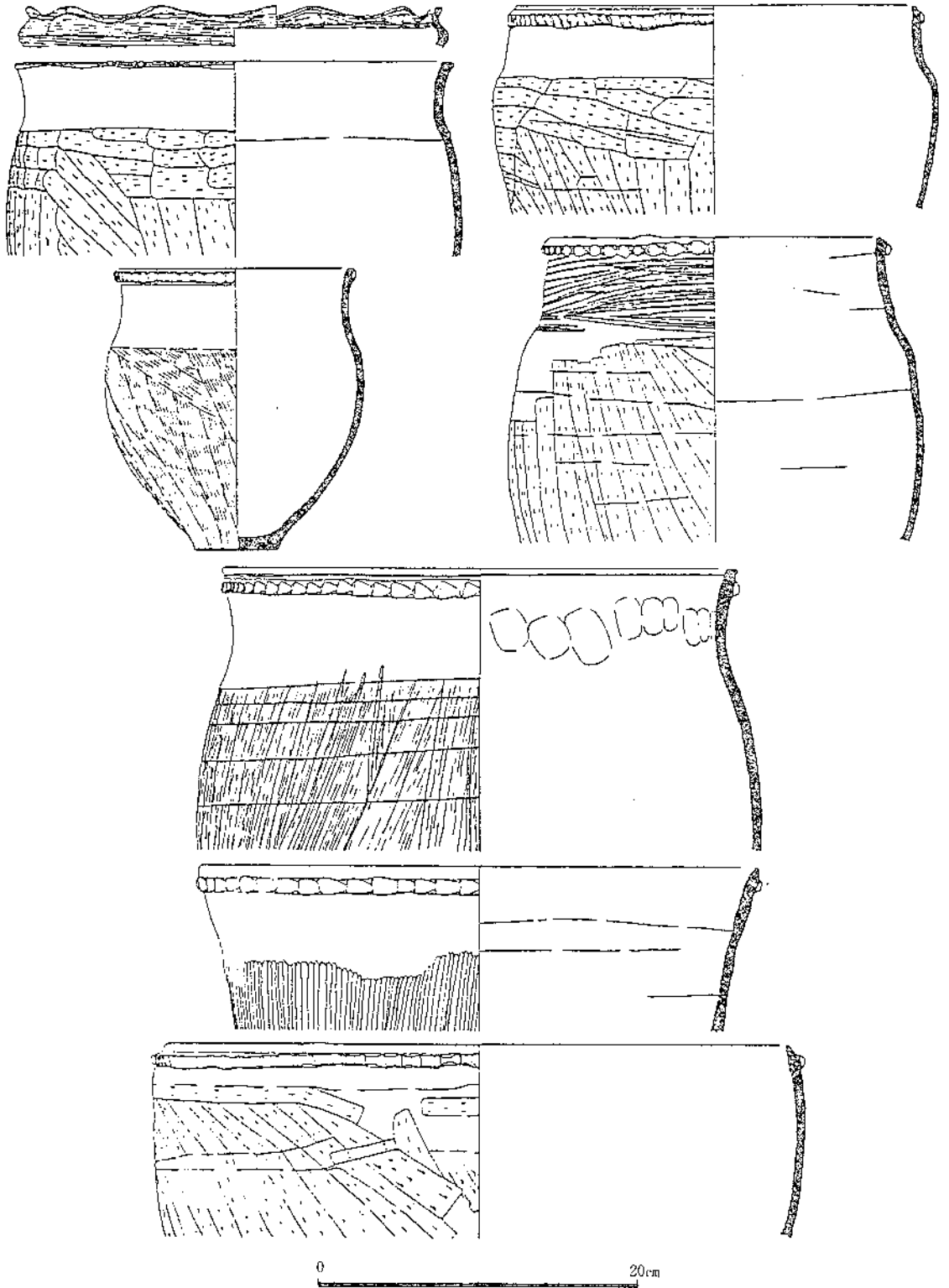
まさに我々の今後の課題として、こうした交流の具体像を各遺跡の土器から割り出してくれば、近江の縄文時代から弥生時代への移行という混乱期を整理し、鮮明になると考えられるでしょう。

浜崎：それでは、今後の課題も見えて来たことですので、次回に向けて資料の再検討の作業を続けていくことにしましょう。

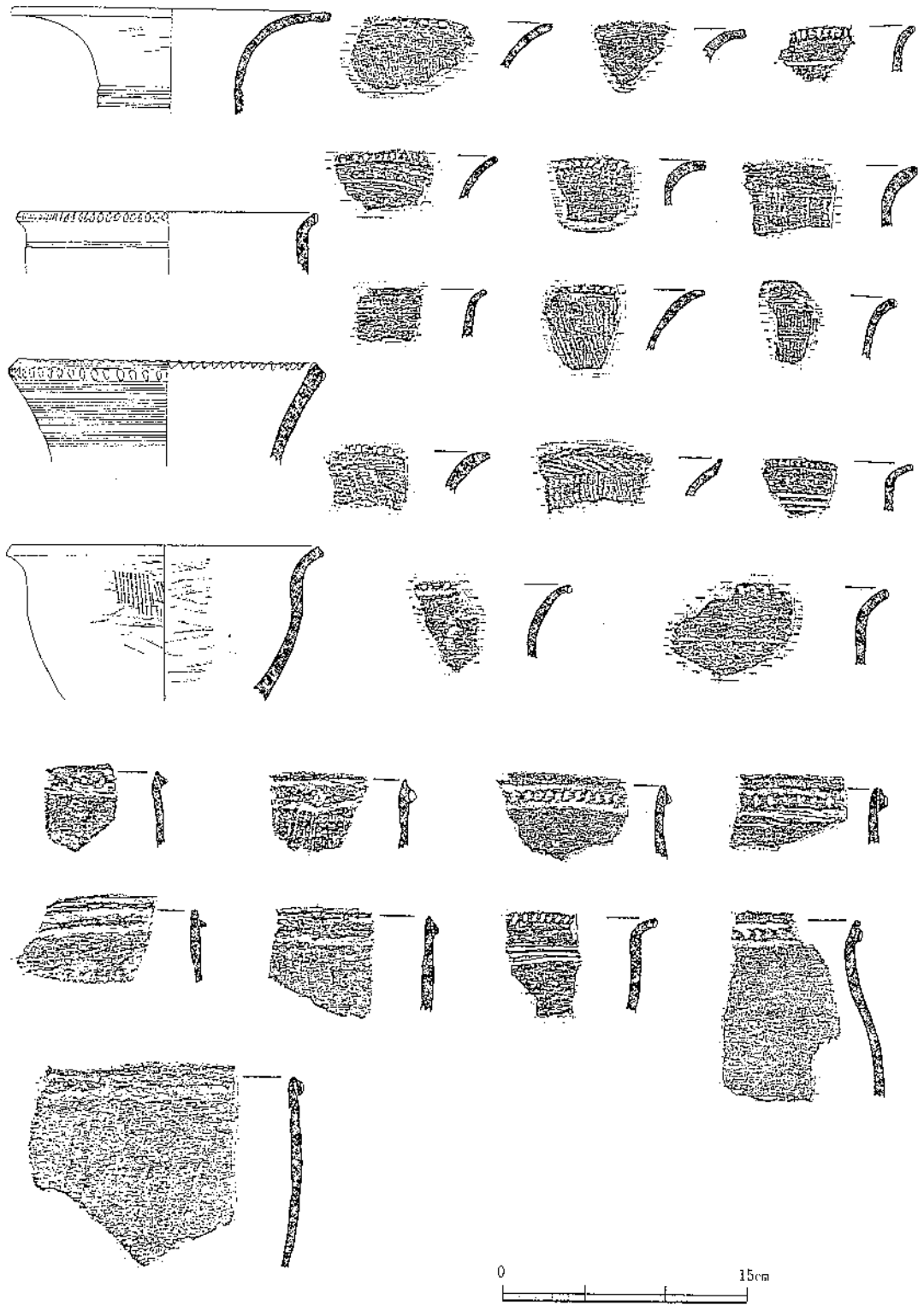
奈良：本日は長時間ありがとうございました。



第13图 滋贺里遗址出土遗物(2)



第14図 福満遺跡出土遺物



第15図 赤野井湾遺跡出土遺物

編集後記

本号には8編の論考を掲載することができました。職員の頑張りに頭が下がる思いです。ただ、少し気になることは、既刊寄稿者が多いということです。次号への課題といたしたいと思います。

翌年度は協会設立20周年。さらなる充実を期し、思いを新たにして出発いたします。今後ともご協力のほど、宜しくお願いします。
(普及啓発事業担当)

平成2年3月

紀 要 第 3 号

編集・発行 財団法人滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大菴町1732-2
TEL(0775)48-9780・9781

印 刷 大津紙業写真印刷株式会社
大津市月輪三丁目9-33
TEL(0775)44-0190(代)